

作品概要

「花のベッドでひるねして」

初出：『本の時間』毎日新聞社  
2012年11月～2013年9月に連載  
初収：2013年11月毎日新聞社

主人公 幹 (30代半ば)  
「海辺でわかめにくるまっているところ  
を母に拾われた捨て子の赤ちゃん」

幹が育った大平家、幹の住む大丘村の  
人々の身に起こる不思議な出来事や夢を  
通して、幹の生い立ちを明らかにすると  
ともに、幹が自分自身の生き方について  
考える作品

研究概要

・作品の特徴・・・「死」

従来のよしもと作品の死 = **死** + **周辺人物の  
落胆・喪失感** → **精神的な回復**

→「花のベッドでひるねして」では当てはまらない  
「死」にまつわる幹の考えや生き方に着目

↓  
生まれてすぐに実の親に捨てられたという事実が大きく影響

本作の「死」のあり方・・・ ×周りの人物の「死」からの「回復」  
○「死」を通して失っていた自分を取り戻す  
「回復」

作品の背景 「違うこと」をしない

「違うこと」をしない

= 自分の意思に反することをしなければ、自分の意思に  
沿った現実を引き寄せられる

☆よしもとの近年の著書でよく見られる考え

○祖父の助言・・・幹の生き方について  
「うっとり花のベッドに寝ころんでいるような生き方をす  
るんだ。もちろん人生はきつきたいへんだし様々な苦痛に  
満ちている。それでも心の底から、だれがなんと言おうと、  
だれにもわからないやり方でそうするんだ」

幹・・・実の両親に育てられなかった劣等感  
他者から偏見の目

祖父 自分の本心にそぐわない意見や考えに惑わされるの  
ではなく、自分が感じた通りに行動し、生きるべき  
→幹は不安を払拭できた

夢について

殺人に繋がる夢

・うさぎが現れる  
・右足の怪我、切断  
→大平家裏で起こっていた事件の予知夢

・平穏な生活の大切さを再認識  
・「「違うこと」をしない」ことの重要性を強調

幹の生い立ちに繋がる夢

・幹の実の両親の人物像  
・幹を浜辺に捨てるまでの経緯  
→幹が自身の生き方について改めて思い返すもの  
×いらぬ子であったから捨てられ育ての母に拾われた  
○実の母親が、置かれた状況下でも自分を生かそうと  
してくれた

幹の心理

幹

・大平家で実の娘のように育てられた  
→血縁関係がないことに関する不安感  
や劣等感はなかった



・実の両親の人物像や出生がわからない  
・実の親に捨てられ、亡くなった子ども  
たちを背負って生きている

☆「哀しい予感」(角川書店、1988年12月)との共通点

主人公 弥生・・・幼少期の記憶が欠如 「自分であまりに自分を把握していない部分が多い」という不安を抱えていた

先行研究

木股知史「失われた幼年時の記憶をたどって、その空白を埋めることによって、  
アイデンティティを安定させることが必要だった」

→幹にも当てはまる

「自分であまりに自分を把握していない  
部分」  
不安や劣等感  
「失われた幼年時の記憶」

作中の夢

「空白を埋めることによって、アイデン  
ティティを安定させる」ことができた  
→「**人生の第二章**」